

点描ぐんま経済

日銀支店長

見聞録

■111■

先日、子供向けの本

の中で銀行やお金などのように描かれているかについて考える機会があった。私がまず思い浮かべたのはドイツの作家・エンデの「モモ」。ここでは人々から時間を奪う「時間貯蓄銀行」が悪役として登場する。効率性を追求するあまりのんびり過ぎず時間や、他人を思いやる余裕を失った現代社会への批判が込められた作品だ。

人々が豊かに暮らすためにお金が果たすべき役割を考え続けたエンデの思想は、ドイツ各地での地域通貨の発行につながったと言わ

児童文学と銀行

れている。

次に思い浮かんだのはフランスの作家・サンテグジュペリの「星の王子さま」。王

間の姿だ。

残念ながら、児童文学の中では銀行やお金は悪いイメージで登場しやすいようだ。もっとも、そうではない本もある。「クレヨン王国

黒の銀行」(福永令三著)では、主人公の女の子がクレヨン王国の不

思議な銀行の預金口座

として登場するうえ、

主人公が乗る車はスバル・レオーネだから群馬とのつながりもあってうれしい一冊だ。

銀行やお金自体は善

でも悪でもなく、大切

を行っており、子供たちが正しい金銭感覚や

経済知識を身に付けられるよう支援している。県内の金融機関も

子供向け見学会や大学

と連携した公開講座などを通じて金融知識の向上に努めている。

正しい知識次世代に

さらに、昨年11月に公表された政府の「資産所得倍増プラン」では、金融

子さまが4番目に訪れた星に住むビジネスマンは星を数えるのに忙しい。なぜ星を数えるの? と聞く王子さまに、ビジネスマンは「ほしをじぶんのものにするれば、かねもちになれるんだ。かねもちにな

から、黒い馬、クワガタ、アリ、ホタル、雷雲など「黒いもの」を引き出して、強盗犯をや

お金の使い方を学ぶことは、より良い社会の実現のために重要な。県内では、群馬県、前

針だ。こうした活動が実を結び、未来の児童文学の中で銀行やお金

つつけたり祖父の住む村をダム開発から救ったりする。銀行が味方

金融広報委員会の活動願っている。

肥後秀明(ひご・ひであき) 1969年生まれ。茨城県出身。東京大経済学部卒。92年に日本銀行入行後、金融機構局審査企画課長兼上席審査役、金融機構局審査連営課長兼上席審査役などを



経て2022年4月から現職。